

「人の子が来る」

2015年12月08日

ルカによる福音書 21 章 25 節～28 節。「それから、太陽と月と星に徴が現れる。地上では海がどよめき荒れ狂うので、諸国の民は、なすすべを知らず、不安に陥る。人々は、この世界に何が起こるのかとおびえ、恐ろしさのあまり気を失うだろう。天体が揺り動かされるからである。そのとき、人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを、人々は見る。このようなことが起こり始めたら、身を起こして頭を上げなさい。あなたがたの解放の 때가近いからだ。」

聖書を書き残したイスラエル人はメッセージを伝える場合、抽象的な概念を用いることはない。日常的な言葉と具体的な出来事を通して、神の恵みを語っている。その中で、黙示文学は特異な伝達手法である。黙示はアポカリプセと言い「覆いを取り除く」即ち、神からの啓示という意味で、宇宙的な広がりを持ち、天変地異、怪獣などが描かれている。読む者には、覆いは取り除かれることなく、奇妙としか受け取れない。黙示文学は、耐え難い苦難の中で、新しい時の到来を告げる希望の文学と言えよう。

上記の御言葉は典型的な黙示文学である。偽メシアの出現、戦争と暴動、地震、飢饉、疫病などの混乱が起こる。荘厳なエルサレム神殿は崩壊し、堅固なエルサレムの町は滅亡する。耐え難い苦難を経験するが、忍耐して「福音」を宣教し続け、永遠の命に与りなさいと語られた。その後、人の子・メシアの到来が予告されている。「太陽と月と星に徴が現れる。地上では海がどよめき荒れ狂うので、諸国の民は、なすすべを知らず、不安に陥る。人々は、この世界に何が起こるのかとおびえ、恐ろしさのあまり気を失うだろう。天体が揺り動かされるからである。」宇宙に徴が現われ、海は荒れ狂い、人々は世界に何が起こるのかを知らず、不安に怯え、気を失う。天体が揺り動かされる恐怖を味わう。その時、「人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを、人々は見る。」この言葉はダニエル書 7 章 13 節、14 節の黙示からの引用である。「夜の幻をなお見ていると、／見よ、「人の子」のような者が天の雲に乗り／『日の老いたる者』の前に来て、そのもとに進み 権威、威光、王権を受けた。諸国、諸族、諸言語の民は皆、彼に仕え／彼の支配はとこしえに続き／その統治は滅びることがない。」神から全ての権能を受けた「人の子・メシア」が雲に乗って来る。それは、メシアの支配、統治に服する終末の時である。だから、「このようなことが起こり始めたら、身を起こして頭を上げなさい。あなたがたの解放の 때가近いからだ」と注意を喚起している。

世界に終末が来ることは間違いない。どんな状況であるか分からないが、形あるものは全て消滅するからである。黙示文学で表現した文字通りに、雲に乗って主イエスが再臨して、終末がもたらされということはありません。しかし、「初めに、神は天地を創造された」という創造主なる全能の神を信じるなら、当然、歴史に終わりをもたらすと信じる。その終わりは「あなたがたの解放の 때가近い」と書かれているように全き救いの時である。

『ヨハネ黙示録』は「アーメン、主イエスよ。来てください」という主イエスの再臨を待ち望む言葉で結んでいる。終末信仰は非科学的で、理性に反する愚かな信仰であろう。しかし、終末時の完全な救いを待望するから、「身を起こして頭を上げ」て生きることができる。終末を望まずに、今の苦難にどうして耐えられるか。「終わりから、今を生きる」という言葉は真実である。